

まちの史跡めぐり

170

町文化財専門委員

石龍 豊美夫

江戸時代のため池について(1)

『筑前国統風土記』は江戸時代の福岡藩の学者 貝原益軒の著作で、奈良時代に編さんされた「風土記」を継続するという意味で、統風土記という名が付いています。当時の福岡藩の地誌地理や歴史を記した本で、巻之二に「大塘」について書かれています。塘は堤と同じ意味で、本来は土手ですが、福岡では池を指します。

鹿^{しし}府^ふ 裏糟屋郡鹿府村
駕^か輿^う丁^{てい} 表糟屋郡中原村
松延村 夜須郡

筑前国福岡藩領の代表的な大池八か所の内、糟屋郡には三か所があることがわかります。裏糟屋郡は糟屋郡北部を言い、それそれ現在は古賀市に属し、表糟屋郡は糟屋郡南部で、中原は粕屋町仲原です。

○大塘 八所
白水村 那珂郡
勝浦村 宗像郡
植木村 鞍手郡
井原村 怡土郡
千鳥 裏糟屋郡内村

千鳥ヶ池(古賀市久保)については、「底なしの池といわれ、干天へ干ばつにもかれず、池をくみ干そうとすれば必ず豪雨に見舞われると伝え、宗像郡と裏粕屋地方の雨乞の場所とされた」(角川日本地名大辞典・福岡

同辞典には駕輿丁池(現在は興を与に置き換えて表記)について、「福岡平野最大の規模で、周辺には多数の溜池が分布する。駕輿丁池は沖積平野に枝状に延びた小丘の末端部を堤高19メートル、堤長260メートルの堤防で囲んだもので、元禄一〇年(一六九七)の築造と伝える。明和元年の堤・井樋の改修工事の記録では、池床20町7反歩、堤長136間、根置29間で、築造には、延べ10万人以上の労役により数年を要したと推定される。現粕屋町および福岡市東区(多々良・箱崎地区)の耕地800ヘク

タールを潤したが、開墾による灌漑面積の増加、旱魃などにより用水不足の年が多くなり、明和九年(一七七二)に新大間池を築造。寛政一二年(一八〇〇)、駕輿丁池の仕掛水路の完成と井堰の増設が行われ、文化一八年(一八二二)には新大間池の仕掛水路が完成し、余水は駕輿丁池・古大間池・敷縄池にも注いだ」とあります。数字と単位は表記を変えています。

駕輿丁池は粕屋町ですが、一部須恵町と接し、新大間池は水面の半分以上が須恵町に属します。県道35号線(主要地方道筑紫野古賀線)では渋滞緩和のために四車線化の工事が進められています。門松交差点を迂回するバイパス(高架橋)は新大間池に橋脚を建て、その上を通過することになっています。

市内にも多くのため池がありますが、江戸時代またはそれ以前に築造されたものです。ため池は一般に農業用水を確保するのが目的でしたが、現在では遊水池などの防災機能も兼ねています。

農林水産省ホームページには次のように書かれています。「ため池とは、降水量が少なく、流域の大きな河川に恵まれない地域などで、農業用水を確保するために水を貯え取水ができるよう、人工的に造成された池のことです。ため池は全国に約20万箇所存在し、特に西日本に多く分布しています。

ため池の約70%は江戸時代以前に築造され、築造にあたっては、各地域において試行錯誤を繰り返して得られた経験をもとに造られたものと推測されます。ため池の水は、農業用水とし

ただでなく、生物の生息・生育の場所の保全、住民の憩いの場の提供など、多面的な機能を有しています。

また、降雨時には雨水を一時的にためる洪水調整や土砂流出の防止などの役割や地域の言い伝えや祭りなどの文化・伝統の発祥となっているものもあります。

ここで言う「言い伝え」とは水神・龍神の伝説や人柱伝説などを指すでしょう。それらが地名の由来となることもあります。

誰がため池を作ったのでしょうか。江戸時代には土木・建設業者はいません。大規模な土木事業はいずれも地域の人たちの出で、公役によつてまかなわれま

した。農村部に住んだ人たちの内、15歳以上60歳以下の人たちは公役を負担する義務を負いました。年間何日か、交代で人夫として土木事業に従事したので

す。ため池築造、道路補修、橋の架け替えや時には海岸部の埋立(干拓)などがそれにあたります。

言い換えると、ため池は私たちの郷土の先輩たちが自ら築いたその痕跡といふことになります。

篠栗方面から新大間池に水を送る水路(仕掛溝)は地中の岩盤をくりぬいたもので、当時は人力しか頼るものがなく、難工事

だったとされています。その水路が駕輿丁池にも水を運び(灌漑用水)、ひいてはその下流域、粕屋町から箱崎に至る水田を潤したのです。

篠栗町乙犬に地下水路の入口があり、その解説板には次のように書かれています。(隧道はトンネルのこと。)

「新大間池仕掛水路井山隧道(入口)」

この水路のトンネルは江戸時代文政四年(一八二一年)に完成しました。当時、糟屋郡一帯は確実な水源がなく、たびたび干ばつや凶作に悩まされ続けていました。戸原村(現粕屋町)の大庄屋であった長卯平は、水不足を解消するために若杉山の豊富な谷水を新大間池や駕輿丁池に導水する計画をたて、若杉村・尾仲村・乙犬村(現篠栗町)、植木村・本合村(現須恵町)など五ヶ

村の協力を得ながら、文化十二年(一八一五年)に工事に着手しました。順調な工事のように見えましたが、この井山付近は岩盤が厚く、難工事となり資金不足に陥ってしまします。博多の

豪商であった立石久明(戸原村出身)は郷土の苦難を知り、数万両(約20億円)に及ぶ資金提供を行い、全長約4キロメートル

にわたる水路が7年の歳月をかけて完成しました。文政七年(一八二四年)には、駕輿丁池にも分水され約2万人の人々が恩恵を受けたといわれています。



写真1 井山隧道(地下水路)の入口



写真2 井山隧道の説明板(篠栗町乙犬)



写真3 井山隧道説明板の水路絵図(部分拡大)

地下水路を通った水は新大間池(須恵町・粕屋町)から古野浦池(須恵町)を経て駕輿丁池(粕屋町)へと流れ込んでいることがわかります。新大間池からは古大間池(粕屋町)にも分岐しています。

この仕掛水路を流れる水は、現在でも多くの水田を潤し続けており、たいへん重要な史跡となつていきます。(作成 粕屋町教育委員会など。)

なおこの隧道は「山の高さ23・3メートル、トンネル部分の全長79・2メートル、幅1・7メートル」と記録されています。